

研究ノート

『ケツアルコアトル』 覚書

山 田 晶 子

要 旨

D.H. ロレンスの第9作目の長編小説である『羽鱗の蛇』(*The Plumed Serpent*) は、1924年11月～1925年2月に書かれて1926年に出版されたのであるが、この小説には草稿があり、これには『ケツアルコアトル』(*Quetzalcoatl*) という題名がつけられていた。『ケツアルコアトル』は、ロレンスが1923年3月にメキシコを訪れた時、同年5月～6月に書いたものである。そして草稿『ケツアルコアトル』と決定稿『羽鱗の蛇』の主題には違いが見られる。それは、メキシコへ旅行に来た主人公のアイランド人ケイトが、草稿の結末ではイングランドへ帰国するという暗示があるが、決定稿の結末では彼女はメキシコに留まるだろうという暗示が見られることである。このような両作品の大きな違いがなぜ生じているのかを、本論では考察している。メキシコに来て間もない時期に書かれた草稿には見られないのだが、メキシコに来てから暫く時間が経過してから書かれた決定稿では、ロレンスのメキシコに対する思いが肯定的な方向に変化していったため、ケイトがメキシコに留まることを暗示する結末になったのではないのか、と思われる。

キーワード：ロレンスのケツアルコアトル、インディアン神話、草稿と決定稿、ケイトとテレーサ、メキシコとヨーロッパ、大脳的理解と太陽叢的理解、40歳

序

『ケツアルコアトル』(Quetzalcotal) は、D.H. ロレンスが1923年5～6月に書いたもので、決定稿となった『羽鱗の蛇』(The Plumed Serpent) の草稿である。この草稿は1924年11月から1925年2月に書き直されて、1926年に『羽鱗の蛇』と題名を変更して出版された。1923年5月26日のジョン・ミドルトン・マリ宛に書かれた手紙で、ロレンスはチャパラ(Chapala)においてこの草稿を書き始めたと述べている(Letters IV 446)。しかし、草稿と決定稿では主人公であるケイト・レズリー(Kate Leslie)の生き方が大きく異なっている。『ケツアルコアトル』の結末では、ケイトは、メキシコで知り合ったインディアンの軍人かつ改革者であるドン・シプリアーノ(Don Cipriano)の求愛を受け入れることなく、故郷であるヨーロッパのイングランドへ帰国することを決意する。一方『羽鱗の蛇』では、彼女がケツアルコアトル信仰でドン・シプリアーノの儀式上の妻となり、かつ彼と肉体的にも関係を持つことが書かれ、更に結末でもメキシコに留まることが暗示されている。

草稿と決定稿における以上のようなケイトの生き方の大きな変更は、ロレンスが1922年にアメリカへ渡ってきてからニューメキシコやメキシコで出会ったインディアンの文化や生き方に影響を受けて、1923年に草稿を書いてから1924年～1925年に書き直すまでの約1年半の間に、彼の思想が大きく変化したためと思われる。つまり彼はインディアンの生き方に共鳴を覚えたのである。それゆえ、ロレンスの分身と思われるケイトは、決定稿ではメキシコに留まるという暗示がされており、ロレンスはメキシコ賛歌をしている。

では、ヨーロッパとメキシコでの生き方の違いがどこに表われているかと言えば、それはロレンスが1922年10月に出版した『無意識の幻想』(Fantasia of the Unconscious) というエッセイ集でも述べている人間の脳的(理知的・精神的)理解力を基に生きる人種(ヨーロッパ人)と太陽神経層的理解力(血と肉)を基に生きる人種(インディアン)という人種的な理解力の違いに表われていると思われる。そして彼はまた、脳的理解力はキリスト教の思想と結合しており、太陽叢層的理解力は先史の原始的な生き方と結合していると考えた。

The solar plexus, the greatest and most important centre of our dynamic consciousness, is a sympathetic centre. At this main centre of our first mind we know as we can never mentally know. Primarily we know, each man, each living creature knows, profoundly and satisfactorily and without question, that *I am I*. This root of all knowledge and being is established in the solar plexus. (FUPU 34)

『ケツアルコアトル』覚書

(太陽叢つまり我々のダイナミックな意識の最大の最重要な中心であるものは、共感的中心である。我々の最初の意識のこの中心において、我々は頭腦的意識においては決して知ることができないものごとを知るのである。各人は、各生き物は、深遠に満足いくようにそして疑問なく「我は我である」ということを最初から知っているのである。全ての知識と存在性の根幹は、太陽叢において確立されているのである。)

上の引用で述べられている「我は我」という表現は、『羽鱗の蛇』中で歌われるケツアルコアトル賛歌中の「我(ケツアルコアトル)は在るものなり」(PS 176)と同じ意味であると考えられる。『ケツアルコアトル』中には、ケイトの思考において「太陽叢」という言葉が出てきており、このことから大脳的理解と太陽叢的理解の2元論が、『無意識の幻想』が出版された後に書かれた『ケツアルコアトル』及び『羽鱗の蛇』に主題として関わっていると思われる。

ロレンスは、1519年にコルテスが率いるスペイン人たちのメキシコへの侵略以来、インディアンたちが本来の血と肉の生き方を蹂躪されて、ヨーロッパのキリスト教を押し付けられて苦しんでいると考えた。それゆえ、ケツアルコアトルというインディアンの古来の神を復活させる小説を書くことにより、そして主人公ケイトに思想の冒険をさせることにより、キリスト教の大脳の思考が与える人間の生き方の歪みを読者に提示している。この大脳の思考の歪みは単にヨーロッパ人の悲劇を提示しているのみならず、彼は現代人の機械中心主義とアメリカ的拝金主義を批判しており、精神主義(大脳の思考)の行き過ぎを反省するべきであることを促している。ケイトの生き方が草稿から決定稿で変化することを考察することにより、ロレンスの思想の冒険を考察したいと思う。

I ロレンスのケツアルコアトル

ケツアルコアトルは、メキシコ・インディアンの古来の神である。『羽鱗の蛇』の付記に載っているケツアルコアトルの特徴は、ロレンスが決定稿で書いているケツアルコアトルとは性質が異なっており、また、草稿のケツアルコアトルと多少異なっている。ゆえに彼が『羽鱗の蛇』で書いたケツアルコアトルは、ロレンスの思想を託すのに適したものに変わっていると見える。彼は『羽鱗の蛇』を書く以前からキリスト教を批判する作品を書き続けていた。『恋する女たち』(*Women in Love*)や『アルヴァイナの墮落』(*The Lost Girl*)や『カンガルー』(*Kangaroo*)や『アーロンの杖』(*Aaron's Rod*)がこの代表的なものである。『羽鱗の蛇』では、さらにキリスト教批判を強めているが、インディアン神話に登場するケツアルコアトル神の採用は、キリスト教批判をするための方便であったとも言える。

先ず、インディアンのケツアルコアトル神話とロレンスの小説のケツアルコアトル神の違いを見てみよう。『羽鱗の蛇』の追録「アステカ神話のスケッチ」(PL 553-9)によるとインディアンの神話では、ケツアルコアトルは風と火と雨の神である。一方、『羽鱗の蛇』では、彼は大空のみならず大地と火の神であることが強調されているが、この点がインディアンの神話とは異なっている。インディアン神話ではケツアルコアトル神の外形は蛇であった。そして彼は全能の神の息子であり、兄弟神であるテツカトリポカ (Tetzcatlipoca) と対立関係にある。しかし、『ケツアルコアトル』と『羽鱗の蛇』においては、テツカトリポカ神は登場していない。また、『ケツアルコアトル』と『羽鱗の蛇』では、ケツアルコアトル神を助けるのはウィチロポチトリ神 (Huiyzilopochtli) であり、彼は大地と火の神である。しかしインディアンの神話では、ケツアルコアトルを助けるのはゾロトル神であって、ウィチロポチトリはケツアルコアトルの腹心としては登場していない。更に、ケツアルコアトルとウィチロポチトリは、インディアンの神話ではそれぞれ異なった話に登場する神なのである。つまり、ロレンスは自身の小説において、両神の性質と役割を創作したと言える。

次に、『ケツアルコアトル』と『羽鱗の蛇』におけるケツアルコアトル神の性質の違いについて考えてみたい。『ケツアルコアトル』において、新聞記事に載ったケツアルコアトル帰還の記事を読んで、ケイトはその神の特徴を思う。「彼は空気と光の神であり、半分が鳥であり半分が大蛇であった」(He was god of the air and light, half bird, half serpent. Q 29) とあるように、ケツアルコアトルは「空気と光」の神であり、『羽鱗の蛇』におけるように「大地と火」の神であることは強調して書かれていない。一方、「今や、ケツアルコアトルが帰還した。片方の手を天に届かせ、片方の手は地獄に届かせている」(Now Quetzalcoatl is come, with one hand reaching to heaven, and one hand reaching to hell, to speak to the Mexicans. Q 187) とあるように「天国」と「地獄」の二道の神であることが分かり、これは『羽鱗の蛇』と同様である。そして驚となって空を駆け、蛇となって地中を潜ることが書かれている (Q 237)。また、『ケツアルコアトル』では、この神が妻を持っていたと書かれているが、『羽鱗の蛇』では、ケツアルコアトル信仰が女を必要とするものであり、性の重要性が強調されているが、妻を持つのはウィチロポチトリであり、その妻は、マリンチという女神になる儀式を受けるケイトである。『ケツアルコアトル』では、マリンチは「雨」の女神となっているが、インディアン神話では、ケツアルコアトルが「雨」の神であって、そこにはロレンスの小説で女神マリンチの役割をする女神は登場していない。また、『ケツアルコアトル』では、ケツアルコアトル神とウィチロポチトリ神は兄弟であり、ケツアルコアトル神が「笑う」神であると書かれている (Q 267)。「笑う」ケツアルコアトルは『羽鱗の蛇』にも書かれ、「笑い」の属性を持つ神は、キリスト教の神の属性とはつきり異なっているといえる。¹⁾

『ケツアルコアトル』覚書

更に『ケツアルコアトル』では、この神が「血の柱」であると書かれ (Q 279)、性の神であることが分かる。ここでは「血の柱」はドン・ラモンと関わっているのであるが、『羽鱗の蛇』ではドン・ラモンのみならずドン・シプリアーノとも関連して書かれ、水浴びをする彼が太陽を受けて赤く染まり、それを見ていたケイトには「血の柱」と思われる。

『羽鱗の蛇』において強調されているケツアルコアトルの特徴は次の7点である。

- ① 色が黒い神である。
- ② 「明けの明星」、「宵の明星」である。
- ③ 「恐怖の神」である。
- ④ 「火の竜」である。
- ⑤ 「性愛の神」である。
- ⑥ 大宇宙と小宇宙がケツアルコアトルを媒介にして関連している。
- ⑦ パン神と関連している。

以上の7点は、男女の理想的な関係は何かという探求に収斂していく。つまり、ロレンスは、ケツアルコアトル神を男女の性愛を司る神として設定しており、これがケイトとドン・シプリアーノとの結婚という形を取って表されていると考えられる。

また、『ケツアルコアトル』においても『羽鱗の蛇』においても、ケツアルコアトル信仰が始まる中心地である湖が登場するが、『ケツアルコアトル』においてはそれが実在の地名チャバラ湖 (Lake Chapala) であるが、『羽鱗の蛇』においては「チャバラ湖」という名前は虚構の名前であるサユラ湖 (Lake of Sayula) という名前に変更されている。虚構の名前に変更されたことにより、ロレンスはケツアルコアトル神の姿を、自身の求める存在に変更することを可能にして主題を強調していると思われる。

II ケイトの描かれ方の相違

『ケツアルコアトル』と『羽鱗の蛇』において最も大きく異なっている点は、主人公であるケイト・レズリーの生き方である。前者の結末においては、ケイトはヨーロッパへ帰ろうと決意する。一方で、後者の結末では彼女は、私をここに引き止めてほしいとドン・シプリアーノに嘆願する。この箇所から『羽鱗の蛇』では、彼女がメキシコに留まりたいのであろうと考えられる。では、草稿と決定稿では、なぜこのような違いが出てきたのであろうか。

ロレンスが1922年にアメリカを訪れ、更にメキシコを訪れてから比較的早く書いた『ケツアルコアトル』(1923) と、1925年に新たに書き直した『羽鱗の蛇』の年月の経過が、ロレンスにメキシコ的な生き方に共鳴を覚えさせたものと思われる。彼は、『羽鱗の蛇』を出版するまでに『プリンセス』(*The Princess*)、『馬に乗って去った女』(*The Woman*

Who Rode Away), 『セント・モア』 (*St Mawr*), 『太陽』 (*The Sun*) 等の短・中編小説を書いており、これらでは、ヨーロッパ的な生き方の女性が異教的な生き方へ変化するか或いは異教的な地で男性を破滅させることを主題にしている。『プリンセス』という中編小説は、1924年9月に書き終えられた。この小説の主題は、プリンセスと呼ばれる貴族の血を引いていると考えられるイギリス女性は、基本的に男性嫌いでありニューメキシコで住民のメキシコ人の案内人口メロと性的に結ばれたが、最終的に彼を拒否したため口メロが殺されるというものであり、性的に男性を受け入れない白人女性の怖さが描かれている。プリンセスはニューイングランド人の母親の血を引いており、作者によって清教徒の禁欲性が批判されている。一方『馬に乗って去った女』は1924年6月に書かれたが、主人公の白人女性が、メキシコでの束縛された生活に嫌気が差してインディアンを求めて高い山中に入って行き、自身をインディアンの儀式に捧げるというものであるが、この短編小説は『プリンセス』の女性とは反対の生き方をしている。この主人公の女性は常に「彼女」と書かれており、具体的な名前が書かれておらず、「女」そのものとして登場している。この短編においては作者は、インディアンに代表される男性性に「生」の目標を置いていると考えられる。『セント・モア』は、1924年6月に書き始められ1925年5月に『プリンセス』と一緒に出版された。「セント・モア」というのはゲール語であり「偉大な」と言う意味で、雄の黒い馬に付けられた名前である。この中編小説ではこの黒馬とルウという名前の女性が主人公である。セント・モアは「黒い神」の化身と考えられており、「目に見えない火」「大きく燃えるような恐ろしい目」「闇」「沈黙」「別世界の存在」「悪魔」「残酷な」「非人間的」「親密でない」「高貴な」「先史古代の生物」「蛇のよう」「太陽のよう」「温かい」「孤独な」「野生的」「雷のよう」等の特徴を備えている。まさにケツアルコアトルと同じ特徴を持っていると言える。この馬は、イギリスからニューメキシコへ運ばれることになるが、これは彼を愛するルウによって命を救われたためであった。イギリスでは男性に怪我を負わせたために殺されることになっていたのだが。²⁾ 『太陽』という短編は1925年12月に書かれた短縮版であるが、1928年に書かれた第2版は無削除版である。両者の主題に違いはない。この『太陽』については『言語と文化』前号に書いたのでここでは省略する。³⁾ これらの短・中編小説を読んでも、ロレンスが新大陸でキリスト教思想に反発を強めていき、異教的な思想へ傾倒していったことが分かる。

ゆえに、ロレンスが1923年3月にメキシコへ来てまだ間が浅い同年5月に書かれた『ケツアルコアトル』では、ケイトは異なった人種の文化・思想を受けれることが出来にくく、最終的にヨーロッパへ帰国することを決意するに至るのであろう。草稿と決定稿の違いを列挙してみよう。

① 『ケツアルコアトル』においてはケイトは38歳であるが、『羽鱗の蛇』においては彼

女は40歳である。この年齢の違いは何ゆえかと考えるに、『ケツアルコアトル』においては、「ケイトは再生しなければならない、それは白人種の再生を代表している」という普遍的な主題が明確になっていないためと思われる。一方で、『羽鱗の蛇』においては、ケイトは人生の半ばまで生きてきてあと1週間で40歳になることが書かれており、更に40歳の誕生日を迎えてから、彼女がこの人生の折り返し点と思う40歳という年齢にこだわっていることが強調されている。それは何ゆえかと言えば、彼女はすでに2度結婚したのだが、最初の夫とは離婚し2番目の夫には先立たれていて、自分の今後の人生を見つめなおすために世界を旅行をして回っており、人生の新たな目標を探しているためである。つまり、ケイトにはメキシコで彼女を変化させる何かが生じるのであろうと、読者が期待するように書かれている。「40」という数字は、象徴的に重要な意味を持っている。シンボル事典によると、一般にそれは「待つこと」「準備」「試練」「懲罰」の意味を持つ（『世界シンボル事典』1035）。また多くの民族の葬儀において亡骸からあらゆるものが、あらゆる目に見えぬ魂も決定的に抜け出していくのに必要な日数であるということである（同 1035）。ここからも、ケイトがヨーロッパでの生活・慣習・思考等を全て捨て去って、ケツアルコアトル信仰に身をゆだねるのを待つ意味が、彼女の「40」という年齢に表されていると考えられる。

- ② ドン・ラモンの再婚相手であるテレサと、ケイトの女としてのあり方が比較して書かれているが、『羽鱗の蛇』ではケイトの視点から書かれている箇所が、『ケツアルコアトル』では、テレサの視点から書かれている。

前号の『羽鱗の蛇』論において述べたように、決定稿ではケイトがマリンチとしてではなくて、普通の意味でのドン・シプリアーノの妻になってメキシコに留まるという結末の暗示は、ケイトがドン・ラモンの再婚相手であるテレサに感化されたためであることが分かる。それゆえ、『羽鱗の蛇』においては、ケイトが自分はテレサよりも女として下位にあるのではないかと考えることが書かれている。つまりケイトが新たな女性として蘇ることを強調するために彼女の内省を書いている。

一方で、『ケツアルコアトル』においては、ケイトはまだ普遍的な女性像まで高められていないので、彼女の視点でテレサと比較するのではなくて、テレサの視点から「女性」について書かれている。このように、草稿と決定稿においては、作者が「女性」を考察するうえでの視点の移動がある。

『ケツアルコアトル』におけるテレサの思いは次のようである。

Teresa had answered these questions in her own way, and taken her stand. And she had fathomed her secret dislike of the white woman, the same

dislike she felt for all foreign white women. They were so assured, and they kept their souls so fast for themselves. They never gave their souls to their husbands.

.....

Now, since she had given her soul to Ramon, and taken his soul, she suddenly felt contempt for these assured, foreign white women who talked to men like men.

.....

But Kate had saved Ramon's life. And Kate was undeniably beautiful. And somewhere Kate had a true tenderness, like Teresa's own tenderness, which was also cautious and reasoning as well as deep. And Ramon wanted Kate to marry Cipriano, because Cipriano wanted it. (Q 283)

(テレーサはこれらの疑問に彼女なりに答えを見出しており、自分の立場を取った。そして彼女は、他の全ての外国白人女性に対する嫌悪感と同じものである、この白人女性に対するひそかな嫌悪感を推し量っていた。彼女たちは非常に自信を持っているし自身のためにその魂を離そうとしない。彼女たちは自らの魂を決して夫に与えない。[中略] 今や、彼女は自分の魂をラモンに与えたので、そして彼の魂を引き受けたので、突然彼女はこれらの自信を持った白人の外国人女性に対して軽蔑を抱いた。男のように話す白人女たち。[中略] しかしケイトはラモンの命を救ってくれた。そしてケイトは疑いようもなく美しかった。そしてケイトはどこかに、テレーサ自身のやさしさと同じ本物のやさしさを持っていた。それは深いと同じく注意深くて分別があるものであった。そしてラモンはケイトがシプリアーノと結婚することを望んでいた。シプリアーノがそうしたがつているからであった。)

But would Kate now leave off treating her as inferior ? That was the point? For, undeniably, Kate, in a very subtle and indefinable way had treated Teresa as inferior. Had felt her an inferior: slightly.

.....

Since she had married Ramon, however, Teresa was determined not to accept this implication of inferiority. (Q 283-4)

(しかしケイトは彼女を劣った者として扱うことを止めるであろうか。それが問

題であった。というのは、ケイトは、非常に巧妙で分かりにくいやり方でテレサを劣った者として扱ったからであった。彼女を劣った者と感じていた。微かに。[中略]しかしながら、テレサはラモンと結婚したので、この劣等性を断固として承諾しない決心をした。)

以上の引用は『ケツアルコアトル』におけるテレサのケイトへの劣等意識を述べたものであるが、両女性の関係性が『羽鱗の蛇』ではケイトの視点から書かれ、彼女がテレサを女として上位であると認める気持が書かれている。そしてドン・シプリアーノとの結婚を目指すことになる。ドン・ラモンとケイトとテレサの三角関係において、テレサがケイトに対立意識を持ったが、ラモンと結婚したのがテレサであったために、テレサはケイトに対して優越感を抱いている、というような恋愛小説の側面を、『ケツアルコアトル』は持っているものであり、これはロレンスの哲学的な主題を持った『羽鱗の蛇』に比較すると、通俗的な恋愛小説の一面を持っている感じがする。また、『ケツアルコアトル』では、ドン・ラモンがケイトを巡ってシプリアーノに嫉妬している、という点も書かれている。一方で、『羽鱗の蛇』においては、ケイトの再生を通して白人種の再生を目指すという普遍的な主題が描かれているため、個人的な段階での男女間の葛藤はそれほど書かれていない。

- ③ 『ケツアルコアトル』では、ケイトは「個人」の女性として書かれており、彼女の視点から見たメキシコ紀行であるかのようにも読める。それゆえ彼女のアイルランド人としての履歴が詳しく述べられている。『ケツアルコアトル』ではケイトの母親はフィッツパトリック令夫人で、貴族の夫(准男爵)を持っていたことがはっきり書かれているが、『羽鱗の蛇』では、具体的な両親の地位や名前については書かれていない。そして『ケツアルコアトル』では、ケイトの母親に対する愛情がかなり多く書かれているが、『羽鱗の蛇』では彼女と母親の関係については具体的に書かれていない。また、『ケツアルコアトル』では、ケイトの子供への思いも『羽鱗の蛇』よりも多く書かれている(Q 312-7)。一方で、『羽鱗の蛇』では、ケイトの個人的な事柄はあまり具体的に書かれておらず彼女は普遍的な女性として書かれており、この小説が芸術作品として優れていることが分かる。ロレンスの思想が成熟しているためであろう。
- ④ 『ケツアルコアトル』では、ケイトは女神マリンチになる儀式を受け入れられない。「個人」としてのケイトが書かれている『ケツアルコアトル』では、彼女は、自身の血とシプリアーノの血の違いを感じて彼との結婚を承諾できなくて、最終的にケツアルコアトル信仰を受け入れられないのである。それゆえ、結末ではヨーロッパへ帰国する決意をする。

しかし『羽鱗の蛇』では、作者がケイトを通して白人種全体の再生を書こうとしているので、メキシコの原住民に違和感を抱く彼女に対して、シプリアーノは第1章から、時間が経つのを待ってみましょうと、言って、彼女の変化を期待している。そしてケイトは迷いながらも徐々にメキシコの生き方に感化されていくのであって、最終的にそこに留まるであろうことが暗示されている。

結論

以上に述べてきたように、インディアン神話に登場するケツアルコアトル神とロレンスが書いた小説におけるケツアルコアトル神は大きく異なっている。また草稿である『ケツアルコアトル』の神と『羽鱗の蛇』における神においてもケツアルコアトルの特徴において後者では強調が行われており、ロレンスが自身の思想を述べるに当たり、インディアンの神であったケツアルコアトルを利用していると思われる。そのために主人公であるケイトの描写にも大きな変更が加えられているのである。そして、草稿である『ケツアルコアトル』と決定稿である『羽鱗の蛇』を読み比べることによって、『羽鱗の蛇』の主題は非常に明確になるのである。

注

- 1) 拙論『『虹』再考——笑う「女」——(1)』（『一般教育論集』第29号：愛知大学一般教育研究室：2005年）及び拙論『『虹』再考——笑う「女」——(2)』（『一般教育論集』第30号：愛知大学一般教育研究室：2006年）参照のこと。
- 2) 拙論「D.H. Lawrence と “the invisible” —— *ST. Mawr* を中心に ——」（『文学論叢』第105輯：愛知大学文学会：平成6年）参照のこと。
- 3) 拙論『『羽鱗の蛇』論考——「二道」の神について——』（『言語と文化』第17号：愛知大学語学教育研究室：2007年）参照のこと。

引用文献

- Lawrence. David Herbert. *The Plumed Serpent*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987. (略号PS)
- . *Quetzalcoatl*. A New Directions Books: New York, 1995. (略号Q)
- . *Fantasia of the Unconscious & Psychoanalysis and the Unconscious*. Penguin Books, 1975. (略号FUPU)

『ケツアルコアトル』覚書

———. *The Letters of D.H. Lawrence Volume IV 1921-24*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987. (略号*Letters IV*)

シュヴァリエ, ジャン&アラン・ケールブラン／金光仁三郎訳『世界シンボル事典』大修館書店, 1996.